

二〇一〇年七月二〇日(参加者一七名)

対局をと見かふ見して扇風機	うつき
つむ撫ぶること紫陽花の毬に触れ	"
水筒を袈裟懸けにして浴衣の子	"
百度踏む出でし百足に目もくれず	"
郡上へと浴衣しのばせ旅靴	"
夕焼けを咀嚼してゐる牧の牛	宏 虎
饒舌も寡黙もありて川床に酔ふ	"
空の底抜けたるごとく大夕立	"
海峡は船の銀座や雲の峰	わかば
野の草の朝日をはじく露涼し	"
波止涼し漁火遠くまたたきて	"
夜を濯ぐ腕白坊主寝つかせて	有 香
風化して読めぬ碑蛇の衣	"
火ばさみに捕へし百足逃げにけり	"
駅広のミストの涼し誰も憩ふ	かれん
梅雨明けてうち仰ぐ日のかく眩し	"
白南風にレースのカーテン遊びすぎ	"
大玻璃を開けて薫風独り占め	きづな
アガパンサス今盛りなる路地涼し	"
時計草 保育園 今 昼寝 中	"
大夕焼 隈無く空を染めあぐる	はく子

梅雨明くるコーヒーカップは海の色	"
梅雨空へ日がな白煙焼却炉	"
梅雨明けを告ぐるごとくに飛行雲	ひかり
雲の峰川原は子らのサッカー場	"
ダンプカー過ぎりて合歓の花揺るる	こすもす
手づくりの皿に盛られし夏料理	"
遠富士の見えて海辺の夏館	菜 々
青田風稽古囃子を乗せて来る	"
青のままなる信号機神輿くる	百 合
雨やんで風鈴風に唄ひそむ	"
雲の峰へとまっしぐら高速道	ひろみ
虫喰ひの葉っぱに透けて夏の空	"
濃淡にそよぐ棚田の青田風	ぼんこ
夏雲かはた噴煙か桜島	小 袖
川原へ垂直降下つばくらめ	せいじ
耳鳴りにあらず初蝉目覚めけり	満 天
葉の先に珠のしずくや梅雨明ける	"
と見る間に真紅へ変はり紫蘇ジュース	"

定例会のみる選

二〇一〇年七月二〇日(参加者一七名)